

道元禪師の行持道環と天台の仏身論

清野宏道

はじめに

通例、道元禪師（一一〇〇—一一五三、以下道元）の修証論は修証一等・証上の修等と言われるが、行持道環もそれと同格のものと言い得る。これは『正法眼蔵』「行持上」巻の、

仏祖の大道、かならず無上の行持あり、道環して断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり。

『道元禪師全集』（以下『全集』）一（一四五頁）

という文に因んだ言葉である。即ち、「仏道を修行し、証覚に到っても行によって—仏法・仏道を—不退転に護持するところに、発心から証覚、更には証上までもが僅かの間隔もなく螺旋のように向上する」ということである。換言すれば、「行の全体に証が現成する」「行が証そのものである」とも言い得る。ここで修行に重きが置かれているのは言うまでもないが、これを体系的に見れば、発心・修行・菩提・涅槃が相即の関係にあると首肯し得る。言わば、この四者は各々が他の

三を具えているのである。これが行持道環の趣意であるが、そうしたところから、これは修行論とも成仏論とも言え、更には仏身論にも繋がる修証の一体論と言える。ここに、修証に対する道元独自の見識を見出し得ると考えるが、そうであればその思想的基盤が問題となろう。本考察の主旨は行持道環の教理的根拠を探ることである。今回は、特に天台の六即説に仏身論的視点を付加して考察を行うこととする。尚、ここでいう天台とは、基本的に智顛（五三八—五九七）や湛然（七一—七八二）の教学を指すことを一言しておく。

天台六即説との関連

さて、行持道環と六即説の関わりは『宝慶記』と『辨道話』にある。周知の通り、『宝慶記』は如浄（一一六二—一二二七）に対する参問の記録であり、『辨道話』は道元が帰朝後に初めて和文で著した学人に対する坐禅徳憑の書である。ここでは両書の性格や内容について論じる余地がないため子細は他

に委ねるが、特に注目すべきは『宝慶記』第四十四条と『辨道話』第七問答である。両者は共に修証・弁道の在り方を主題としているが、共通する内容として初心後心の是非が説かれている。その要点を並記すれば、

○然則為_レ用_レ初心_レ得_レ道、為_レ用_レ後心_レ得_レ道。…然則後以_レ初為_レ本、初以_レ後為_レ期。今以_レ現_レ喻_レ此初後。譬如_レ焦_レ炷、非_レ初、不_レ離_レ初、非_レ後、不_レ離_レ後。…『宝慶記』(『全集』七、四八頁)

○求法の高流、仏法のなかに真実をねがはむ人、初心・後心をえらばず、凡人・聖人を論ぜず、…しるべし、得道のなかに修行すべしといふことを。『辨道話』(『全集』二、四七一頁)

となる。即ち、「初は初、後は後として各々立つが、初後は不離の関係にあり共に是である。ゆえに得道の中の修行である」ということである。この「初」は修行の初め、「後」は修行の後を指す。そうであれば、こうした初心後心の見識が発心に始まる行持道環の背景に関わると言えよう。

六即の教理は智顛の所産であり、真理と円融する段階を六位に分けて説く修行論であるが、その内容は『摩訶止観』五略の発大心章に最も詳しい。要旨を述べれば、所謂、円頓章で語られるような真理と一体の境地(理即)を言語を通して知り(名字即)、それを心に観じる(観行即)ことよって仏の境界に似てくる(相似即)と、真理の一部が身に現れ(分真即)、最後に真理が円満に身に現れる(究竟即)ということである。『法華玄義』ではそれを修行の次第に即し、

道元禪師の行持道環と天台の仏身論(清野)

世間相常住理即也。於_レ諸過去仏。若有_レ聞_レ一句_レ名字即也。深信隨喜觀行即也。六根清淨相似即也。安_レ住_レ實智中_レ分証即也。唯仏与_レ仏究竟實相。究竟即也。 一下(『大正』三三三、六八六頁上)

と端的に説くのであるが、重要なのは『摩訶止観』に、

約_レ六即_レ顯_レ是者。為_レ初心_レ是_レ後心_レ是_レ。答。如_レ論_レ焦_レ炷。非_レ初不_レ離_レ初。非_レ後不_レ離_レ後。… 一下(『大正』四六、一〇頁中)

とあるように、その六即が初心後心の是非を機縁として成立している点である。要するに、修行の初後に理から究竟までの「六」は立つが、各々は「即」の関係で結ばれるため初後相即であることを発心の時点に約して論じているのである。

こうした六即説では、真理の境界と現実の修行という二面が立つ。これを成仏論に重ねれば、例えば『法華玄義』に、

一切衆生理性菩提。五品名字菩提。六根相似菩提。四十一位分真菩提。妙覺究竟菩提。 五下(『大正』三三三、七四五頁上)

とあるように、前者における「六」は各々仏(理即仏)であるが、後者では実際の修行によって究竟位を目指すこととなる。しかし、先に「非_レ初不_レ離_レ初」…とあるように両者は不離の関係にある。従って、六即説は諸法即実相という仏の境界を離れない現実の修行によって究竟の極果を証すべき旨を説いていると言えるのである。ゆえにこれは仏身論に直結すると考えられよう。道元の初心後心に対する觀念が行持道環と密接に関わることを考慮すれば、こうした智顛の六即

説もその布石として位置付くことが推察されるのである。

智顛における仏身論の特徴

古来より仏身論には一身・二身等の説があるが、それらは各々が正依とする経論によって成り立つ。天台の教理は『法華經』を正依とするわけであるから、智顛の仏身論も一貫してこれを離れることはない。その思想は『法華文句』「積寿量品」に詳しく、本迹二門が基礎となっている。詳細は花野充道氏の論考⁽²⁾に委ねるが、その要点を端的に述べれば、

此品詮量通明三身。若從別意正在報身。

九下（『大正』三四、一二九頁上）

とあるように、智顛は三身説を以て報身正意の立場に立つたと言える。智顛の言う三身は、理の法身毘盧遮那・智の報身盧舍那・用の応身釈迦であるが、報身を正意とした所以は、

報身智慧上冥下契。三身宛足。我成仏已來甚大久遠。故能三世利益衆生。所成即法身。能成即報身。法報合故能益物。正意是論報身仏功德也。

九下（『大正』三四、一二九頁上）

とあるように、報身を法身の理に冥じつつ応身の用に契うため三身を具え、久遠に菩薩道を行じて衆生を利益する仏と見たからである。即ち、法身の常住と共に報身における実修実証の因果を重視し、それを現実の仏道修行に重ねたのである。それは『法華經』の久遠仏が、所謂、常住法身の仏ではなく

実際の修行によって成仏した仏であることによる。このように、智顛は『法華經』の久遠仏を報身と見るが、それは本地自行の仏であるため、それが直接我々に法を説くことはない。だからこそ本地垂迹の応身が法報の用として働くのであるが、「積寿量品」で「一身即是三身不_レ一不_レ異」（『大正』三四、一二九頁上）とか、「非_レ本無_三以垂_レ迹。非_レ迹無_三以顯_レ本。本迹雖_レ殊不思議一也」（『大正』三四、一二九頁中）と言うように三身・本迹は隔絶してはいないのである。そのため、応身についても「顯_三於応身不_レ離_レ法身」（『大正』三四、一三二頁上）と言うのである。この点は特に銘記すべきである。こうした智顛の仏身観を通して先の六即説を見ると、その教理が報身正意の三身説に基礎付けられていることが解る。

結論

『正法眼蔵』等の説示に法身等の文言があることから、道元は三身説を前提にしていたと言えるが、「即心是仏」巻に、いはゆる諸仏とは、釈迦牟尼仏なり。…過去・現在・未來の諸仏、ともにほとけとなるときは、かならず釈迦牟尼仏となるなり。これ即心是仏なり。

『全集』一（五八頁）

とあることから、道元は釈迦仏を正意としたと言える。ただ、それは単なる本地垂迹の応身的な釈迦仏ではない。ここで三世諸仏を釈迦仏としている点から、それは三身を包括する釈

迦仏と言い得る。また「供養諸仏」巻で、

諸仏かならず諸法実相を大師としますこと、あきらけし。釈尊また、諸仏の常法を証します。『全集』二(二二六頁)

と説いていることから、それに因果のあることが解る。従って道元の言う釈迦仏は、三世に渡って因果を具える釈迦仏と考へ得るのである。更に、先述の行持道環を始め、道元の修証論が修証の一体論であることを考慮すれば、道元は修行の当体における仏の現成を説いたと言えるが、「発無上心」巻で釈迦仏の「我与大地有情同時成道」に対し、

しかあれば、発心・修行・菩提・涅槃は、同時の発心・修行・菩提・涅槃なるべし。『全集』二(一六四頁)

と示している点を踏まえると、その修行によって働く仏を釈迦仏と認識していたと言える。それを踏まえて「洗浄」巻の、
身心に修行を威儀せしむる正当恁麼時、すなはち久遠の本行を具足円成せり。このゆえに、修行の身心、本現するなり。

『全集』二(八一頁)

という説示を見ると、それが久遠の本行を具足する仏であることが解る。即ち、三世に渡って因果を有し、久遠の本行を具足する釈迦仏が修行の当体に働くと言うことである。従って、道元の言う釈迦仏は「報身仏的な久遠の釈迦仏」と言い得るのであり、それと同等の境界を而今における自己の修行上に実証すべきを修証一体の修行論によって主張していると

道元禅師の行持道環と天台の仏身論(清野)

考へ得るのではなからうか。それは「行仏威儀」巻の、

諸仏かならず威儀を行足す、これ行仏なり。行仏それ報仏にあらず、化仏にあらず。自性身仏にあらず、他性身仏にあらず。『全集』一(五九頁)

という説示によってより鮮明になる。ここで道元は法報応等の具体的な仏身に對する認識を払い、諸仏の境界を「行仏」として押さえるのである。つまり、修証の一体を基準とした現実の修行に重ねて、報身仏的な久遠の釈迦仏が我々と共に而今において修行していることを主張しているのである。

以上の考察に従えば、道元の仏身思想は久遠の釈迦仏に証明された上での行仏思想と考へ得るのであり、行持道環はそうした仏身論に裏付けられた修証論と言えるのであり、その思想構造は報身を正意とした智顛の仏身論や修行論と重なる面が多分にあると思われる。

- 1 今回は特に池田魯參氏の『宝慶記―道元の入宋求法ノート―』(一九八九年六月、大東出版社)、「道元禅師と天台教学(一)」「(三)」「『宗学と現代』四、二〇〇一年三月)に示唆を受けた。
- 2 「本覚思想と本迹思想―本覚思想批判に依えて―」(『駒澤短期大学仏教論集』九、二〇〇三年一〇月)。

〈キーワード〉 道元、智顛、仏身、修証、行持道環

(曹洞宗総合研究センター宗学研究部門研究員)